

尾口のでくまわし 仮名手本忠臣蔵

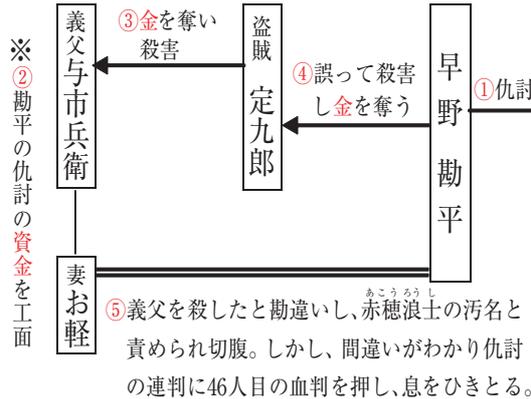
国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし
仮名手本忠臣蔵

主な登場人物

高師直 (吉良上野介)

仇

塩冶判官高貞 (浅野内匠頭) 家臣
千崎弥五郎・原郷右衛門
大星由良之介



あらすじ (第五段・第六段)

刃傷事件の不始末のため、赤穂浪士の敵討連判に加われなかった早野勘平は、京都郊外山崎の、女房お軽の実家で獵師として生計を立てている。雨の夜、街道で出会ったもとの同輩千崎弥五郎から御用金を持参すれば一味に加えてもらえることを知る。一方、お軽は勘平のためにひそかに遊女に身売りすることを決意していた。舅与市兵衛がその半金を受けとりに行き、五十両の入った財布をふところにして家路についたが、途中で斧定九郎に金を奪われ殺されてしまう。が、ちょうどそこで獵をしていた勘平は猪と間違えて定九郎を撃ち、懐にあった五十両を持ち帰った (以上第五段)。山崎の家では、お軽と母親が、もどらない与市兵衛を案じていたが、祇園の遊女屋の主人が連れに来たので、お軽はもどってきた勘平に見送られつつ駕籠で出て行った。入れ替わりに、獵師仲間が与市兵衛の死体を運び込んだので大騒ぎになっているところに千崎弥五郎らがやって来る。勘平がふところの財布から金を渡そうとしたところ、舅を殺した犯人と決めつけられ、勘平はいいわけがでず切腹する。が、傷を調べたところ鉄砲傷ではなく刀傷であることがわかり勘平の汚名は回復され、一味の連判状に名前を書き込まれたが、そのまま息絶えてしまった (以上第六段)。



かなでほんちゆうしんぐら
仮名手本忠臣蔵 第五段

- ① ことわざ。肉食である鷹は、餓えても稲穂などの穀物をついばむよ
うなことはないことにたとえて
武士はどんなに貧乏をしても信念
を曲げないことのとえにつかう
② いまの京都府乙訓郡大山崎町。宇
治川・木津川・桂川の三つの川が
合流するあたり。JR東海道本線
の駅があり、江戸時代もいまも京
都と大阪の境にあたる地域
③ まずしい住まい
④ 塩治判官高貞（浅野内匠頭にあた
る）に仕える武士。萱野参平がモ
デル。判官のお供で出た折り、妻
顔世御前の腰元であるおかると逢
い引きを楽しんでいたが、ちよう
どそのとき判官が高師直（吉良上
野介にあたる）に刃傷に及ぶとい
う大事件が発生し、勘平は責任を
感じて、切腹しようとするが止
められ、おかると駆け落ちし、い
まおかるの実家に身を寄せている
⑤ 「商いの種」にする鉄砲の「種
が島」（火縄銃）にかけたもの
⑥ 鉄砲のようにはげしく降る雨
⑦ 「震動雷電」の転化した語。稲妻
が光り、雷がはげしく鳴るさま
⑧ 旧暦の6月
⑨ 弓張提灯。竹を弓のように曲げて
提灯の上下にかけて開くように作
った提灯
⑩ 突然で、失礼ですが
⑪ すぐ
⑫ 獵師のこと。鉄砲の一発撃てばす
ぐ獲物が捕れることから
⑬ 火縄。銃に火をつけるもの

「鷹は死しても穂は積まず」と、たとえに洩れず入月や。日数
も積もる山崎の辺りに近き侘び住居。早野勘平、若気の誤り、
世渡る元手、細道伝い。この山中の鹿猿を、撃つて商う種子島
も、用意に持つや袂まで、鉄砲雨のしだらでん、誰が水無月と
夕立の、晴れ間をここに松のかげ。
向こうより来る小提灯。これも昔は弓張りの、灯火消さじ、
ぬらさじと、合羽の裾に大雨を、しのいで急ぐ夜の道。
「いや、申し申し。そつじながら、火を一つ御無心」
と立ち寄れば、旅人も着と身構えし、
「むう。この街道は無用心と知って、合点の一人旅。見れば飛
び道具の一口商い。えこそは貸さじ。出直せ」
と、びくと動かば一討ちと、眼を配れば、
「いやあ、なるほど。盗賊とのお目違い。ごもつともせんばん。
我としてはこの辺りの狩人なるが、先ほどの大雨に火口も湿り、

若気のあやまちのため、主君のもとを去ら
ざるをえなくなった早野勘平ですが、「鷹は
死んでも穂は摘まず。」ということわざにも
あるように、武士としての誇りを忘れず、京
都郊外の山崎村で、妻のお軽及びその両親と
いっしょにつつましく暮らしています。今は
獵師として、鹿や猿を鉄砲で撃つて、生計の
助けとしています。が、ちようどいま、雷が鳴
る大雨の夜道を、鉄砲をたもとで抱えた勘平
がやってきて、松の木蔭で雨の晴れ間を待っ
ています。と、向こうから、小さい提灯の灯
りが消えないように合羽を着た、武士らしい
男がやってきました。「申し訳ありませんが、
タバコの火をお借りしたい。」と勘平が声を
かけると、その武士はぱつと身構え「この街
道筋は危険だと承知の上での一人旅。見れば、
飛び道具を持つている。とすると、簡単に火
は貸せぬぞ。」と、ちよつとも動けば切り
捨てるといいうしぐさです。「いやあ、なるほ
ど。盗賊と間違えられましたか。それもごも
つともなこと。しかし、私はこのあたりの
狩人です。さきほどの大雨で鉄砲の火口が
しめつてしまい困っております。この鉄砲は
そちらにお渡ししますから、どうぞ火をお貸
し下さい。」

①下心のない言葉

②塩冶判官の家臣。神崎弥五郎がモデル。のち彼も切腹に追い込まれる。
③元氣。武士の用語

④もと同じ主君に使えていた者どうし
⑤武士として、神仏に守られているという思い。のちに出る「武運」も同様の意味
⑥高師直。吉良上野介にあたる。敵役

難儀至極。さあ、鉄砲それへお渡し申す。自身に火を付け御貸し」

と、他事なき詞、顔つきを、きつと眺めて、

「和殿は、早野勘平ならずや」

「そういう貴殿は千崎弥五郎」

「これは堅固で」

「御無事で」

と、絶えて久しき対面に、主人のお家没落の、胸に忘れぬ無念の思い、互いに拳を握り合う。

勘平はさしうつむき、しばし詞もなかりしが、

「ええ、面目もなき、わが身の上。古朋輩の貴殿にも、顔もえ上げぬこの仕合わせ。武士の冥加に尽きたるか。殿、判官公の御供先、お家の大事起こりしは、是非に及ばぬわが不運。その場にもあり合わせ、お屋敷へは帰られず、所詮時節を待つて御詫びと、思いの外の御切腹。南無三宝。皆、師直めがなす業。せめて冥途の御供と、刀に手をかけたれど、何を手柄に御供と、どの面下げて言い訳せんと、心を碎く折から、密かに様子

と、悪意はないという顔つき。その顔をじつとながめた武士が「そなたは早野勘平ではないか。」と声をかけました。「そういうあなたは、千崎弥五郎殿。これはこれはお元気でなにより。」と、二人は久しぶりの対面をなつかしがりませす。主人の家が没落して以来の、忘れられない無念の思いの数々が、互いの胸にあふれてきて、手を握り合うものの、しばらくは言葉もなくうつぶむいていただけでしたが、やがて勘平は口を開き、「ああ、本当に面目ないことです。昔からの同輩であるあなたの前で、顔もあげられない私のこの境遇は、武士としての運も尽きてしまったかと思われませす。お殿様のお供をしていたその最中に、お家の大事がおこったのは、わたしの不運というしかありません。しかも、その場に居合わせなかったため、御屋敷へは帰られなくなり、やむなく時節を待つて、御詫びをと思つていたところ、思いがけず殿は御切腹ということになってしまいました。すべてはみな師直のせいです。せめて冥途へ御供しようと思いい、切腹しようと刀に手をかけはしましたが、何の手柄もないまま死んだとて、どうしてお供をしたと言えようかと思いい直し、どうにかして、主家にもどる手だてはないかと、心を碎いておりました。

- ①大星由良之助とその息子力弥。大石内蔵助・主税がモデル
 ②原郷右衛門。赤穂浪士のまとめ役
 ③いまはなき主君塩冶判官
 ④恨みを晴らすこと。敵討

- ⑤敵討に加わる意思を表明したものの名を記した巻物
 ⑥仏教用語。未来永遠にわたって名譽なこと
 ⑦優曇花は三千年に一度花が咲くといわれ、それにあわせて仏が出現するとされることから、めつたにないすばらしい巡り合わせのこと
 ⑧武士としての名譽を守ること
 ⑨武士同士が、武士道の倫理に基づいて、私的に同情したり援助したりすること
 ⑩以前に犯した罪
 ⑪理屈にない、筋道が立っており、かつ同情すべき点がある
 ⑫敵討の秘密を簡単に口にするわけにはいかない

⑬でたらめ

⑭お墓

⑮必要なお金

を承れば、由良殿御親子、郷右衛門殿をはじめとして、故殿の鬱憤散ぜんため、寄り寄りの思し召し立ちあり、との噂。我らとても、御勘当の身というでもなし、手がかり求め、由良殿に対面遂げ、御くわだての連判に、御加え下さらば、生々世々の面目。貴殿に逢うも優曇花の、花を咲かせて侍の、一分立て給われかし。古傍輩のよしみ、武士の情け、お願い申す」と、両手をつき、先非を悔いし男泣き、理せめて不憫なる。弥五郎も、傍輩の悔やみ、道理と思えども、大事をむざと明かさじと、

「これさこれさ、勘平。はてさて、お手前は身の言い訳に取りまぜて、御くわだての、いや、連判などとは何の戯言。さようの噂かつてなし。それがしは由良殿より、郷右衛門殿へ急ぎの使い。先君の御廟所へ御石碑を建立せん、との催し。しかし我々とても浪人の身の上。これこそ塩冶判官殿の御石塔と、末の世までも人の口のかかるものゆえ、御用金を集むる、その御使い。先君の御恩を思う人を選り出すため、わざと大事を明かさねず。先君の御恩思わば、なあ、合点か合点か」

そのうちに、由良之助殿や郷右衛門殿たちが、亡き殿の無念を晴らすため、いろいろと工作しているという噂を聞きました。私とても勘当された身というわけではありませんから、なんとか手がかりを求めて、由良之助殿と対面し、一味のくわだてに加えていただけたら、武士としての面目が立つというものです。ここで貴殿にお会いしたのはなにかの御縁でしょう。なんとか武士としての花を咲かせ、面目を立てさせてください。どうぞ、同輩のよしみで、武士の情けをお願いいたします。」と両手をついて、過去を悔いつつ男泣きする姿は、まこと不憫なものでした。弥五郎も、同輩がこうして泣いて頼む姿に同情はするものの、しかし、敵討連判の秘密をそう簡単にもらすわけにもいきません。「これ勘平、そなたがさつきから口にはしているくわだてとか連判とかいうのはなんだ。そんなたわごとを口にするものではない。私が由良之助より郷右衛門殿へ頼まれた急ぎの使いというのは、亡き殿の墓所に石碑を建てたいということなのだ。自分ほわれわれの仕えた殿様のために、後の世まで残る石塔を建てようと、そのための費用を集めるために、走りまわっているのだ。そのことをまず合点することじゃ。」

① たくらみ。石碑を建てるためといいつつ、敵討のことを語っている
② それとなく知らせる

③ いろいろな思案すること。心が乱れること

④ 主君に仕えることができない状態。ここでは、敵討に加われないことも含む

⑤ あなた。武士が同輩に対して用いる

⑥ 反語の言い方。どうしていやと言いましょか。決していやとは言いません
⑦ よくよくお願いします

⑧ 反対しようのない言葉

⑨ 明後日。あさって

と、石碑になぞらえ大星の、巧みを余所に知らせしは、げに傍輩のよしみなり。

「はあ。かたじけない、弥五郎殿。なるほど。石碑と言いつて、御用金の御こしらえあること、とつくに承り及び、それがしも何とぞして、用金を調べ、それを力に御詫びと、心は千々に砕けども、弥五郎殿、恥ずかしや、主人の御罰で今このざま。誰にこうとの便りもなし。されども軽が親、与市兵衛と申すは頼もしい百姓。我々夫婦が判官へ、不奉公を悔やみ歎き、『何とぞしてもとの武士に立ち返れ』と、叔父姥ともに歎き悲しむ。これ幸い、御辺に逢いし物語り、段々の子細を語り、『もとの武士に立ち返る』と、言い聞かさば、わずかの田地もわが子のため、何しに否はえも言わじ。御用金を手掛かりに、郷右衛門まで、お取り次ぎ、ひとしお頼み存ずる」

と、余儀なき詞に、

「なるほど。しからばこれより、郷右衛門殿まで、右の訳をも話し、由良殿へ願うてみる。明々日は必ずきつと御返事。すなわち、郷右衛門殿の旅宿の所書き」

と、石碑になぞらえて由良之助の企てを、それとなく知らせます。まさに、これこそ同じ主君に仕えた者ゆえの、心づかいというものでしょう。「ありがとうございます、弥五郎殿。わかりました。その、石碑を建てるための御用金集めのこと、私は早くからうかがっております。私もなんとかしてお金を整え、それを持参してお詫びをしたいと思っておりますが、罰が当たって、いまはこんな姿です。ですから、お金を工面するあたりがありません。しかし、お軽の親の与市兵衛という人は頼りになる百姓です。我々夫婦が御主君に奉公で、きずにいることを悲しみ、なんとかしてもとの武士にもどってほしいと嘆いております。今日、あなたから聞いた話をして、武士にもどれる次第を話せば、田畑を売ってでも、お金を用意してくれるにちがいません。そうすれば、そのお金をきつかけにして、もとの武士にもどれるはずですよ。ですから、そのときはどうぞ郷右衛門殿に、口ききをしていただくようお願いいたします。」と頼む言葉を聞き、「なるほど。それならば、これからそのわけを郷右衛門殿に話し、そなたのことを由良之助殿に願うてみよう。では、明後日ということにしよう。それまでに、必ずよい返事を持ってまいれよ。よいな。郷右衛門殿の住所は、ここに書いてあるから。」

①山崎と橋本の間にかかる狐川の渡し

②決して油断するな。(ここから舞台は、勘平らのいた道より先の街道筋に変わる)

③子供のために正しい判断がでなくなることを闇にたとえる。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰和歌集)

④心が真つすぐで真面目な父親

⑤塩治家の家老、浄瑠璃・歌舞伎では、由良之助と対立し、敵討の邪魔をする悪役に設定されている。赤穂藩の家老大野九郎兵衛がモデル

⑥その息子。この場面にだけ登場し、すぐに殺される役だが、現在の歌舞伎では若手花形役者の役所になっている。その経緯については、落語の「中村仲蔵」などに語り伝えられている芸談が有名

⑦身の置き所がない、というのと、盗賊を意味する「白浪」をかけた

⑧はばの広い刀

⑨刀をタテにこじりが下がるように差すこと。浪人などに多く見られる、きちんとしない、崩れた差し方

と、渡せば取って押し戴き、

「重々の御世話かたじけなし。何とぞ急に御用金をこしらえ、

明々日お目にかからん。それがしが有り家お尋ねあらば、こ

の山崎の渡し場を左へ取り、与市兵衛とお尋ねあらば、早速相

知れ申すべし。夜ふけぬうちに、早くもお出で。この行先は、

なお物騒。随分抜かるな」

「合点合点。石碑成就するまでは、蚤にも食わさぬこの体。御辺

も堅固で。御用金の便りを待つぞ。さらば」

「さらば」

と両方へ、立ち別れてぞ急ぎ行く。

またも降りくる雨の足、人の足音とほとほと、道は闇路に迷

わねど、子ゆえの闇につく杖も、直なる心堅親父、一筋道の

後から、

「おおい、おおい、親父殿、良い道連れ」

と呼ばわって、斧九太夫が悴、定九郎、身の置き所白浪や、

この街道の夜働き、段平物を落とし差し、

「さつきから呼ぶ声が、貴様の耳へは入らぬか。この物騒な街道

と、住所を書いた紙切れを渡します。それを押しただきながら勘平は、「重ねてのお言葉、ありがとうございます。なんとしても急いで御用金をこしらえて、明後日、お目にかかりたいと思います。私の家は、この山崎の渡し場を左に曲がったところです。そのあたりで、与市兵衛の家はどこかとお聞きになればすぐにわかります。夜が更けないうちに早く宿にお帰りください。この先はまだまだ物騒ですから、どうかご用心を。」「承知した。石碑のことが成就するまでは、この体、ノミにも食わさないでおくつもりじゃ。そなたも元気でな。御用金の連絡を待つておるぞ。」では、さらばでございませう。と、二人は別れていきました。

さて、同じ街道の先の方に場面は変わります。さらに激しく降り続く雨のなかを、勘平の舅、与市兵衛が、杖を突きながらやっています。ふところには大金の入った財布が入っていますので、早く家に帰ろうと急ぎ足です。その後ろから声をかけてくるものがありました。「おおい、そこのおやじ殿、道連れになろうぜ。」これは斧九太夫のせがれ定九郎です。いまは落ちぶれて、この街道で盗賊ぐらしをしており、腰には、大きな巾の広い大刀を一本差しています。

①村
②借金を頼むこと

③一文のお金も借りることができな
かった
④うまくいかない

⑤編におなじ。編模様の布
⑥じつくりと

⑦世間によくあるような

を、良い年をして、大胆大胆。連れになろう」

と、向こうへ回り、ぎよろつく目玉、ぞつとせしが、さすがは老人、

「これはこれは、お若いに似合わぬ御奇特な。私も良い年をして、一人旅はいやなれど、さあ、いづくの浦でも、金ほど大切なものはない。去年の年貢に詰り、この中から一家中の在所へ無心にいたれば、これもびたひらなか才覚ならず。埒の明かぬ所に、長居はならず。すごすご一人戻る道」と、半分言わず、

「やい、やかましい。有様が年貢の納まらぬ。その相談を聞きには来ぬ。これ、親父殿。俺が言うこと、とくと聞かっしやれや。まあ、こうじゃわ。こなたの懐に、金なら四、五十両のかさ、嶋の財布にあるのを、とつくりと見付けて来たのじゃ。借して下され。男が手を合わす。定めて貴様も何ぞつまらぬことか。子が難義に及ぶによつてと言うような、有格なことじゃある。けれど、俺が見込んだら、はて、しよことがないと諦めて、借して下され。借して下され」

「さつきから呼んでいる声が耳に聞こえないのか。物騒なこの雨の夜の道を、年寄り一人とは、なんとも大胆なこと。さあ、いっしょに行こう。」と追い越して、ぎよろぎよろ目玉でにらみつけます。与市兵衛はびつくりしました。そこはさすがに年の功、「これはこれは、お若いのに似ずおやさしいことですね。私も、この年でひとり旅をするのはいやでございますが、どこであつてもお金ほど大切なものはありません。去年の年貢を払うことができず、親類のところへ借金に駆け回つておりましたが、なかなか貸してくれるところがなく、すごすごとかえるところでもございました。」と答えるのを、半分までも言わず、「ええい、やかましい。お前の年貢の相談が聞きたいのではない。お前のふところ、ざつと四五十両は入った財布があるのを見つけて、こうして追ってきたのじゃ。どうかその金を貸してくれ。これ、こうして大の男が手を合わして頼むのじゃ。おまえも、子供のためとか何とかいろいろわけはあるのじゃやうが、俺がこうして頼むからには、もう、いやとは言ふな。おとなしく、貸してくれ、な、貸してくれと言ふのじゃ。」

① 突然起こる頭痛や腹痛

② いずれも江戸時代によく用いられた薬

③ 殺してしまうこと
④ やさしく

⑤ 投げ出せ

⑥ 長さ二尺八寸(約85センチ)の刀を頭の上に構え、真つ正面から切り下げること
⑦ 竹を割るように、タテにまっすぐ勢いよく切り下げること

⑧ どうしても
⑨ あなた

と、懐へ手を差し入れ、引きずり出す嶋の財布。

「ああ、申し、それは」

「それはとは、これほどここにあるもの」

と、引ったくる手に縋がり付き、

「いえいえ、この財布は、跡の在所で草鞋買うとて端た錢を出

しましたが、跡に残るは昼食の握り飯、霍乱せんようと、娘

がくれた和中断、反魂丹でござります。お許しなされ下さりま

せ」

と、引ったくり、逃げ行く先へ立ち廻り、

「ええ、聞き訳のない。むごい料理するがいやさに、手ぬるう

言えば付け上がる。さあ、その金ここへまき出だせ。遅いと、

たつた一討ち」

と、二尺八寸挿み打ち。「のう、悲しや」と言う間もなく、唐竹割

りと切り付くる。刀の廻りか手の廻りか、はずれる抜き身を

両手にしっかつかみ付け、

「どうでもこなた、殺さっしゃるの」

「おお、知れたこと。金のあるのを見てする仕事。小言吐かず

と、ふところへ手を入れ、縋の財布を引きずり出そうとします。「ああ、それは。」「それは、とは、これ、この財布か。」と引ったくる手にすがりついて、「いえいえ、この財布のなかには、金が入っていません。朝出る時に、はした金が入ってましたが、それも草鞋を買うために使ってしまった。あとは、昼飯の残りの握り飯と、娘が入れてくれた薬、和中断と反魂丹だけです。どうぞ返して下され。」と、いうのもきかず、引ったくろうとします。与市兵衛が逃げまわって抵抗するので「ええい、聞き分けのないやつ。刀で切ったりするのがいやだから、やさしく頼んでいるのに、つけあがりやがって。早く出せ。早く出さぬと一打ちに切り捨てるぞ。」と二尺八寸の刀で大上段に斬りつけます。「ああ、悲しや。」という間もなく、唐竹割りに斬りつけます。勢いあまって狙いがはずれた抜き身を、与市兵衛は両手でしっかりとつかみながら、「どうしても、そなた、殺そうというのか。」

「あたりまえだ、金のあるのを見つけてのことじゃ。文句を言わず、さっさとくたばれ。」

① 胸元

② しかたがない

とくたばれ」

と、肝先へ指し付けければ、

「ま、ま、ま、ま、ま、まあ、待つて下さりませ。はあ、是非に及ばぬ。なるほど、なるほど。これは金でござります。けれどもこの金は、私がたった一人の娘がござる、その娘が命にもかえぬ、大事の男がござります。その男のためにいる金。

ちと訳あることゆえ、浪人していただきます。娘が申しまするは、

③ 毎晩

④ 自分は貧乏であるが
⑤ 工夫

⑥ 「血の涙」は悲しみのために涙が血のように流れること。悲しみの涙をしぼりながら

『あのお人の浪人も、もとはわしゆえ、何とぞして、もとの武士にしてしんぜたい、しんぜたい』と、かかとわしとへ毎夜さ頼み。ああ、身貧にはござります。どうもしがくのしようもなく、ばばといろいろ談合して、娘にも呑み込ませ、婿へは必ず沙汰なしとしめし合わせ、ほんにほんに、親子三人が血の涙の流れる金。それをお前に取られて、娘は何となりましょう。

これ、拝みます。助けて下さりませ。お前もお侍の果てそうなが、武士は相身互い、この金がなければ、娘も婿も人様に顔が出だされぬ。たった一人の娘に連れ添う婿じゃもの、不憫にござる。かわゆうござる。了簡してお助けなされて下さりませ。

⑦ ことわざ。武士はお互いに助け合うもの

⑧ かわいそう

⑨ わかって

と、胸元に刀を突きつけます。「まあ、待つてくだされ。それではしようがありません。たしかにその財布のなかにはお金が入っております。しかしこの金には、わけがあります。斬るのはその話を聞いてからでも遅くはないでしょう。この金は、私のたった一人の娘、お軽が大切にしている男のために身を売って作った金でござります。この男、ちとわけがあつて、いまは浪人しておりますが、娘は、この男をなんとかしてもとの武士にもどしてあげたいと、毎晩私と妻のところに来て頼むのです。しかし、まずしい身にはなんの手だてもなく、妻とも相談し、娘にも承知させて、婿にこのことはけつして知らさぬようにという約束で、親子三人が血の涙を流して、工面したお金でござります。それをお前様にとられては、娘の苦労が水の泡になります。拝みます。頼みます。おまえはもとは武士ならば、武士は互いに助け合うものではありませんか。この金がなければ、娘も婿も人前へ顔が出せないことになります。たった一人の娘に連れ添う婿のことゆえ、私もかわいそうでなりません。なんとかしたいと思うのです。そこをわかって、助けてやってください。

①やがて

②たくさん
③叫ぶこと。おとしめた言い方

④おまえ。これも相手をおとしめた
言い方

⑤ことわざ。金銭がすべての災いのも
とである
⑥かわいそうに

⑦芋を串で刺し貫くように、人を刀
で突き刺したままえぐること

ええ、お前はお若いによつて、まだお子もござるまいが、やん
がてお子を持つて御覧じませ。『親父が言いおつたは、もつと
もじゃ』と、思し召して、この場を助けさしやつて下さりませ。
まあ、一里行けばわが在所。金を婿に渡してから、殺されまし
よ。申し申し、娘がよろこぶ顔見てから死にとうござります。
これ、申し。ああ、あれ、あれあれ、あれあれ」
と、呼ばわれど、跡先遠く山彦の、こだまにあわれ催せり。
「おお、悲しいこつちやわ。まつととこぼえ。やい、老いぼれ
め。その金で俺が出世すりや、その恵みでうぬが悴も出世する
わやい。人に慈悲すりや、悪うは報わぬ。ああ、かわいや」
と、ぐつと突く。う、うんと手足の七転八倒、のたくり廻るを、
脛にて蹴返し、
「おお、いとしや。痛かるけれど、俺に恨みはないぞや。金が
ありやこそ殺せ、金がなけりや何のいの。金が敵じゃ、いとし
ぼや。南無阿弥陀。南無妙法蓮華経。どちらへなりと、失せお
ろ」
と、刀も抜かぬ芋刺しえぐり、草葉も朱に置く露や、年も六十

お前様は、まだ若いから子供を持つていない
でしょうが、やがて子供を持つてごらんなさ
い。あのおやじが言ったとおりじゃったなあ、
と思ひ当たるはずです。ですから、この場は、
それに免じて助けてください。もう一里も行
けば私の村、そこでこの金を婿に渡したあと
からなら、いくらでも殺されましよう。娘の
喜ぶ顔を見てから死にとうございます。これ
もし、あれ、あれ。」と叫びますが、その声
は山彦のこだまになって空しく響くだけでし
た。「おお、悲しいことよのう。もつと、嘆
くがいい。老いぼれめ。その金で俺が出世
すれば、そのおこぼれで、お前の婿も出世し
ようぞ。人に慈悲をほどこせば、おまえにも
むくいがあるはず。おお、かわいそうにな
あ。」と言いつつ、さらにぐつと刀で突くと、
手足を七転八倒させて、のたくり廻ります。
それをさらに足で蹴つて「おお、かわいそう
に。痛いだろうが、俺を恨むなよ。金を持つ
ていたから殺しただけのこと、金が敵の世の
中じゃ。かわいそうになあ。南無阿弥陀仏。
南無妙法蓮華経。どこへなりとも消えてい
つてくれ。」

- ①うまくやった
②小判のはし
③手探りで数えること

④泥まみれ

⑤鉄砲で撃たれたが、致命傷にならずに、傷を受けたまま走ってくる猪
⑥身をよける

⑦ひとまとめにして

⑧種子島の鉄砲に弾丸を二個こめて撃つこと。弾丸と火薬を二つずつ詰めて二発いっしょに撃つことにより、命中率をあげる
⑨火薬のためにすすけて黒ずんでい

⑩さあたいへん。しまった
⑪猪を撃ちそこねた

⑫なんにも見えない真つ暗闇

⑬天が授けてくれたもの

四苦八苦、あえなく息は絶えにけり。

「しすましたり」と件の財布、暗がり耳のつかみ読み、

「ひゃ、五十両。ええ、久しぶりの御対面。かたじけなし」

と、首にひっかけ、死骸を直に谷底へ跳ね込み、蹴込む泥まぶ

れ。はねはわが身にかかるとも、知らず立ったる後ろより、一散

に来る手負い猪、「これはならぬ」と身をよぎる。駆け来る猪

は一文字、木の根岩角踏み立て、蹴立て、鼻怒らして、泥も草木

も一まくり、飛び行けば、「あわや」と見送る定九郎が背骨

をかけてどっさり、あばらへ抜ける二つ玉、「うん」とも「ぎ

やっ」とも言う間なく、ふすぼり返りて死したるは、心地よく

こそ見えにけれ。

「猪打ち止めし」と勘平は、鉄砲ひっさげここかしこ、探り

廻りて、さてこそと引つ立てれば、猪にあらざ。

「やあやあ、こりや人じゃ。南無三宝、仕損じたり」

と思えど、暗き真の闇、誰人なるぞと問われもせず、まだ息あ

らんと抱き起こせば、手に当たる金財布、掴んで見れば四、五十両。

「天の与え」と押し戴き、押し戴き、猪より先へ逸散に、飛ぶ

と刀を抜くこともしません。あたりの草や葉を血で染めたまま、与市兵衛の息は絶えました。いまこのとき、六十四の寿命を終えたのであります。定九郎は、「うまくいったわい。」とさきほどの財布を取り出して、暗がりの方で、小判の数を数えています。「ひゃあ、五十両じゃ。ひさしぶりに対面する金じゃ。

こいつはありがたい。」と、首にひっかけ、死骸を谷に放り込み、どろまみれになつて立っています。と、その背中目がけて、一散にかけてくるのは、手負いの猪。「これはいけない。」と身をかわそうとしましたが、猪は一直線に定九郎目がけて、木の葉や岩をふみ分けて走ってきます。あぶないところでよけて、猪の逃げていった先を見送っているその定九郎の背中目がけて、鉄砲玉が飛んできて、背骨からあばらにかけて、見事に打ち抜いてしまいました。「うん」とも「きゃっ」とも言う間もなく、死んでいる様子は、かえつて心地よさそうに見えるほどです。そこに「猪を撃ち止めたぞ。」と勘平が鉄砲をさげてあらわれました。あちこちさがしまわり、これだと引き出してみますと、猪ではなく人間です。「やあ、こりやあ、猪ではなく人間じゃ。どうやら仕損じたようじゃ。」とは思いますが、この真つ暗闇のなかでは、一体誰を撃ったのか、調べることもできません。まだ息があるだろうか、抱き起こしてみますと、手に金の入った財布があたります。つかんでみると、四五十両入っていました。「これは天が与えてくれたもの。」

がごとくに急ぎける。

と押しただきながら、勘平は猪よりもはやく飛ぶようにかけていきました。

かなでほんちゆうしんぐら
 仮名手本忠臣蔵 第六段

①「御崎踊り」が盛り上がった。御崎踊りから親父さま、見にいっしやい。おばあさんを連れて、親父さん」というような内容を「はばんつ」という合の手を入れながら歌う

②麦をつくるときに歌う、地元(二)の民謡(三)(労働歌)の類

③むしろを敷いて寝るような、貧しい小屋のような家

④寝起きの乱れた髪

⑤櫛箱を「あける」に「あかつき」をかける。明け方になつても

⑥髪型(七)の一種。元禄時代、遊女・踊子らの間に流行し、以後、庶民に普及していった。「ゆう」は髪を「結う」とかけことばになつて

⑦「誰に告げる」の「告げ」と櫛の材料の「黄楊(つげ)」をかけた

⑧「杖つき」は六十歳のこと。舞台には杖を突いた姿で登場する

⑨麦が実る時期。旧暦四、五月頃

⑩村の入り口あたり

⑪「益(やく)なし」の音便形。甲斐がないこと。無駄なこと

①みさき踊りがしゅんだるほどに、親父出て見や、ばばんつ、ばばん連れて、親父出て見や、ばばんつ。

②麦かつ音の在郷歌。

所も名におう山崎のこひやくしやう小百姓、与市兵衛がすみか埴生の住家、今は早野勘平が、浪々の身の隠れ里。女房お軽は寝乱れし髪、取り上げんと櫛箱の、あかつきかけて戻らぬ夫、待つ間もとけし投げ鳴田、言うに言われぬ身の上を、誰にかつげの水櫛に、髪の色艶すきかえし、品よくしゃんと結い立てしは、在所に惜しき姿なり。

母の齢も杖つきの、野道とほとほ立ち帰り、

「おお、娘、髪結やったか。美しゆうよう出来た。いや、もう、在所はどこもかも、麦秋時分で忙しい。今も藪(やぶ)際(ぎわ)で、若い衆(しゆう)が、麦かつ歌に、『親父出て見や、ばばん連れて』と歌うを聞き、親父殿の遅いが気にかかり、在口まで行たれど、ようのう影も

「みさき踊りがしゅんだる程に、親父出て見や、ばばんつ、ばん連れて、親父出て見や、ばばんつ。」と遠くから聞えてくるのは、この地方で歌い継がれている、麦かち歌であります。

ここは、お軽・勘平とその親、与市兵衛が住む京都郊外の山崎村、女房のお軽は寝起きの髪をとかそうと、櫛箱をあげながら、朝方になつても帰つてこない夫を心配しつつ、誰にも言えないまま、黄楊の櫛を髪にあてているその姿の品の良さは、こういう田舎に置いておくには、惜しいほです。そこへ、六十歳になるお軽の母親が、杖をつきながら帰つてきて、「おお、髪を結つたのか。美しくなつたのう。いや、もう、この村はどこもかしこも、麦の借り入れ時で忙しい。今も、やぶのあたりで、若い衆が、麦かち歌の『親父出て見や、ばばん連れて』と歌うのを聞いて、親父さまの帰りの遅いのが気にかかり、村の入り口あたりまで行つてみたけれど、まだ影も形も見えない。」

① そうよ

② 無用のこと

③ お軽は塩冶判官の妻顔世御前の腰元であった

④ どうしても

⑤ 田舎

⑥ 「うとましい」のなまり。いやな

⑦ 好きな男といっしょになっているのだから

⑧ やがて

⑨ 「差し合い」は、もともと連句用語の否定形で用いて、遠慮のないさまを言う

⑩ あげつびろげな娘

⑪ うきうきとしているさま

⑫ この当時、京都で一番大きな遊女町

形も見えぬ」

「さいな。こりやまあ、どうして遅いことじゃ。わし、一走り見てきやんしょ」

「いや、のう、若いおなごの一人歩くはいらぬこと。ことにそなたは小さいときから、在所を歩くことさえ嫌いで、塩冶様へ御奉公にやったれど、どうでも草深いところに縁があるやら、戻りやったが、勘平殿と二人いやれば、おとましい顔も出ぬ」

「おお、かか様の。そりや知れたこと。好いた男と添うのじゃもの、在所はおるか、貧しい暮らしでも苦にならぬ。やんがて益になって、『とつ様出て見や、かかんつ、かかん連れて』という歌の通り、勘平殿とたった二人、踊り見に行きやんしょ。お前も若いとき、覚えがあるう」

と、差し合い繰らぬ、ぐわら娘、気もわさわさと見えにける。

「何ほそのように、おもしろかおかしゆう言やつても、心の内はの」

「いえいえ、すんでござんす。主のために、祇園町へ勤め奉公に行くは、かねて覚悟の前なれど、年寄って、とと様の世話や

「そうですか。こりやまあ、どうして遅いのでしよう。わたしも、一走り行って見てきましようか。」

「いやいや、若い女の一人歩きはせぬものじゃ。ことにそなたは小さい時から、在所のなかを歩くのが嫌いだつたから、塩冶様へ御奉公に出したのじゃが、どうやらやはり、草深い田舎に縁があるようで、戻ってきたわけだが、しかしまあ、勘平殿と二人でいられるなら、いやな顔もしないようじやのう。」

「おお、お母さま。そりや当然ですわ。好きな男といっしょにいられるのですもの。田舎だつて、貧しい暮らしたつて、全然、苦にはなりません。やがてお盆になつて、『とつ様出て見や、かかんつ、かかん連れて』という歌のとおり、勘平殿とたった二人で、踊りを見に行くつもりです。お母さんも、若い時にはそうやっていたでしょう。」と、遠慮のない母と娘の間柄、お軽もうきうきとした様子にみえます。

「いくらそんなふう楽しんでおられても、心のうちはなあ。」

「いえいえ、それはもう決心がついています。夫のために、祇園町へ奉公に行くことは、もともと覚悟していたことですから。それよりも心配なのは、年とつたお父様の世話ができないことですよ。」

①身分が低い家来。足輕
寺岡平右衛門。七段目に登場する

③「話のなか」に「中道」をかける。
中道は村のまん中を通っている道
④お軽が勤める遊女屋の名前。伏見の遊郭にあった一文字屋がモデル

⑤あわてふためくさまをいうことわざ「槌で庭掃き」に遊女屋の異名である「はくじんや」をかけた
⑥無事に。事故もなく

⑦これは驚いた
⑧あなたのごところに行ってから今まで

⑨おかしい。不思議だ。「名譽」の変化した語
⑩伏見稲荷の前。伏見稲荷は祇園から山崎へ帰る途中にある
⑪伏見稲荷神社にまつられている狐口に宝の玉をくわえていることから言う
⑫「つままる」はだまされる

かしやんすが」

「そりや言やんな。小身者なれど、兄も塩冶様の御家来なれば、外の世話するようにもない」

と、親子話の中道伝い、駕をかかせて急ぎ来るは、祇園町の一文字屋、「ここじゃ、ここじゃ」と門口から、「与市兵衛殿、内にか」と言いつつ入れれば、

「これはまあまあ、遠いところを。それ、娘、煙草盆。お茶上げましや」と、親子して槌でお家を白人屋の亭主。

「さて、夕べは、これの親父殿もいかい大儀。別条のう戻られましたか」

「ええ、さては親父殿と連れ立って来はなされませぬか。これはしたり。お前へ行ってから、今において」

「やあ、戻られぬか」

「はて、面妖な」

「はあ、もし、稲荷前をふらついて、かの玉殿につままりやせぬかの。これ、この中、ここへ見に来て極めた通り、お娘の年

「それは言うな。身分は低いとはいふものの、兄の寺岡平右衛門も、塩冶様の御家来だから、それとなく気をつけてくれるであろう。」と、親子で話す。その最中に、駕で急いでやってきたのは、京都祇園町の一文字屋の主人です。「ここじゃ、ここじゃ」と門口から入って、「与市兵衛殿、内におられますか。」と言いながら入れれば、「これはまあまあ、遠いところを。これ、お軽、煙草盆を出しなさい。どうぞ、お茶を召し上がってください。」と、親子してお家をかけずりまわって、遊女屋の亭主をもてなそうとします。「さて、昨晩は、こちらの親父殿もご苦労様でした。お変わりなく戻られましたか。」「ええつ、では、親父殿と連れ立ってこなかったのですか。」「これはまた。そちらへ行つてから、今まで。」「では、まだ戻られないということですね。」「はて、ふしぎなこと。」「もしや、お稲荷さまの前をふらついて、狐にだまされたりしたのではないでしょうか。」

- ①遊女奉公の契約期間が五年であること
 ②すばっと
 ③相談がまとまった
 ④契約書
 ⑤名前を書き入れること
 ⑥百兩の半分の五十兩
 ⑦うれしそうに、喜んで
 ⑧午後十時頃
 ⑨しないこと。(大金を持って)夜道は歩かないもの、の意
 ⑩もしかしたら、途中で(道草をして)
- ⑬未払いの金
 ⑭帰ろう
 ⑮おまえ。そなた。目下の者に用いる

も丸五年切り、給金は金百兩、さらりと手を打った。ここの親父が言われるには、『今夜中に渡さねばならぬ金あれば、今晚証文をしたため、百兩の金子お借しなされて下され』と、涙をこぼしての頼みゆえ、証文の上で半金渡し、残りは奉公人と引き替えの契約。何かその五十兩渡すとよろこんで戴き、ほたほた言うて戻られたは、もう四つでもあろうかい。夜道を一人、金持つていらぬもの、と留めても聞かず戻られたが、ただしは道に「いえいえ、寄らしやる所は、のう、かか様」

「ないとも、ないとも。ことに一時も早う、そなたやわしに金見せてよろこばそうとて、いきせきと戻らっしゃるはずじゃに、合点がいかぬ」

「いや、これ、合点の行く行かぬはそつちの詮索。こちはさりの金渡して、奉公人連れて去の」と、懐より金取り出し、

「跡金の五十兩、これで都合百兩。さあ、渡す。受け取らしやれ」

「お前、それでも親父殿の戻られぬうちは、のう、軽。わが身

これ、この間、ここで決めたとおり、娘さんとは丸五年の約束で、その間の給金は、金百兩ということで、きちんと手を打ちました。ここの親父様が言うには、『今夜中に渡さねばならぬ金だから、今晚、証文を書きますので、百兩の金子をすぐください。』と、涙をこぼしての頼みなさるので、証文を書いてもらったうえ、半金の五十兩を渡し、残りは奉公人と引き替えということにしました。その五十兩を渡しましたところ、よろこんで手に持ち、にこにこしながら戻って行かれたのは、もう四つ時分(午後十時頃)でもあったでしょう。夜道を一人、金を持って行かないものだと思えたのですが、聞かずにお金を持って戻られたのだが、もしや道中。「いえいえ、お父様がどこかに寄るような所は。ねえ、お母様。」「ないとも、ないとも。一時もはやく、そなたやわたしに金を見せて悦ばそうと、いそいで戻ってこられるはずなのに、どうも合点がいきません。」「いやいや、合点が行くとか行かないとかいうのは、そちらの話ですから。こちらとしては残りの金を渡し、奉公人になるお軽を、連れて帰りますよ。』と、懐からお金を取り出し、「残りの五十兩、これであわせて百兩です。さあ、渡しますから、受け取ってください。」「そうはいっても、親父様が戻られないうちには、お軽を引渡すというわけには、いきませんが。』

- ①ぐずぐず
 ②話がまとまらない
 ③うんともすんとも言えない。何も言えない
 ④印鑑
 ⑤「これ」をさかさにした語。ここでは、お金のかたちを指で作りがら言う
 ⑥結局はこうしなければならぬ

⑦無理に

⑧意味がよくわからない

⑨母親に呼びかける言い方
 ⑩わけ

⑪そばから

はやれぬ」

「はて。ぐつぐつと埒の明かぬ。これ、ぐつともすつとも言われぬ。与市兵衛の印形証文が物言う。今日から金で買い切った体。一日違えば、れこずつ違う。どうでこうせざすむまい」と、手を取って引つ立てる。

「まあまあ、待て」

と、取り付く母親突き退けはね退け、無体に駕へ押し込み押し込み、かき上げる門口の口、鉄棒に蓑笠打ちかけ、戻りかかつて見る勘平、つかつかと内に入り、

「駕の内なは女房ども。こりや、まあ、どこへ」

「おお、勘平殿、よいところへよう戻って下さった」

と、母のよろこび、その意を得ず。

「どうでも深い訳がある。母者人、女房ども、様子を聞こう」

と、お家の真ん中どつかと座れば、文字の亭主、

「ふう、さてはこなたが奉公人の御亭じゃの。たとえば夫でも何でも、名付けの夫などと、脇よりいらんさままたげ申す者、これなく候、と親父の印形あるからは、こちには構わぬ。早う奉公人

「はて。ぐずぐずと埒の明かぬ話じゃ。これ、ぐずぐず言っておつても、この与市兵衛の印鑑のある証文が証拠。お軽の体は、今日から金で我々が買いつつたもの。一日違えば、稼ぎも違ってくる。こうなれば、こうするしかない。」と、お軽の手を取って、引つ立てます。

「まあまあ、待ってください。」と、取り付く母親を、突きのけはねのけて、無理やり駕籠に押し込み、かきあげようとしたその門口へ、鉄砲に蓑と笠をかけながら戻ってきた勘平が、つかつかと内に入ってきました。

「駕籠の内にいるのは、女房のお軽ではないか。こりや、まあ、どこへ。」

「おお、勘平殿、よい所へよくもどつてくださいました。」と、母親の喜びぶりがよくわからず、

「どうやら深いわけがある様子。お母様、女房、わけを聞きましょう。」と、家の真ん中にどつかりと座りました。一文字屋の主人は、「ふうん、では、そなたが奉公にでる方のご主人ですな。しかし、この証文には『夫でも誰でも、決して邪魔することはございませぬ』とあり、親父様の印鑑も押してあるからには、こちらには関係のないこと。はやく奉公人を受け取ってまいります。」

を受け取ろう」

「おお、婿殿、合点が行くまい。かねてこなたに金のいる様子、娘の話で聞いたゆえ、どうぞ調べて進ぜたい、と言うたばかりで一銭の宛もなし。そこで親父殿の言わしやるには、『ひよつとこなたの氣に、女房売って金調べよう、とよもや思うてではあるまいけれど、もし二親の手前を遠慮していやしやるまいものでもない。いつそこの与市兵衛が婿殿に知らさず娘を売ろう。まさかの時は、切り取りするも侍の習い。女房売っても恥にはならぬ。お主の役に立つる金、調べておましたら、まんなら腹も立つまい』、と昨日から祇園町へ、折り極めに行て、今に戻らしやれぬゆえ、親子案じている中へ、『親父殿が見えて、夕べ親父殿に半金渡し、跡金の五十両と引き替えに、娘を連れて去のう』と言うてなれど、親父殿に逢うての上、と訳を言うても聞き入れず、今連れて去なしやるところ。どうしようぞ、勘平殿」

「これはこれはまずもって、舅殿の心遣いかたじけない。したが、こちにもちよつと良いことがあれども、それは追つて。親父殿

① 武士が貧乏したときは強盗をした

② さしあげたら

③ 交渉して決めに行つて

④ かし

「おお、婿殿、そなたには合点がいかないうことを娘から聞いたので、なんとか工面してあげたいと、言つてみても一銭のあてもない。そこで親父殿が言われるには、『女房を売って金を調べよう』というのを、我々の手前遠慮しているのではあるまいか。では、この与市兵衛が婿殿に知らさず、娘を売ることにしよう。まさかの時は、切り取り強盗しても主君に仕えるのが侍というもの。女房を売つても恥にはなるまい。夫のためのお金を調えるというのであれば、売つてもそんな腹を立てることもあるまい』、というので、夕べから祇園町へ出かけ、話を決めに言きました。が、今になつても戻られぬので、親子して心配しているところに、この親父殿が見えて、『夕べ親父殿に半金を渡したので、残りの五十両と引き替えに、娘を連れていく』と言うのですが、それは親父殿に逢つてからのことにしてください、と訳を話しても聞き入れてくれず、今連れて行こうとしたところじや。どうしましよ、勘平殿。」

「これはこれは。まずは、舅与市兵衛様の心遣いに感謝いたします。しかし、こちらにもちよつといい話があるので、それはのちほどいずれにしても、親父さまがお戻りにならぬのに、妻を渡すわけにはいきませんな。」

①女房の父親であり、証文に印鑑を
押した人物である

②女だけが住むという想像上の島で
あるが、ここは遊郭をたとえたも
の

も戻られぬに、女房どもは渡されまい」

「とは何故に」

「はて、いわば親也、判かかり。もつとも、夕べ半金の五十兩渡されたでもあろうけれど」

「いや、これ京、大阪を股にかけ、女護の嶋程奉公人を抱える一文字屋、渡さぬ金を渡したと言うてすむものかいの。まだその上に確かなことがありてや。この親父が彼の五十兩という金を、手拭にくるくると巻いて、懐に入れらるる。『そりや危ない、これに入れて首にかけさっしやれ』と、俺が着ているこの一重物の嶋のきれでこしらえた金財布借したれば、やんがて首にかけて戻らりよう」

「やあ、何と。こなたが着ているこの嶋のきれの金財布か」

「おお、てや」

「あの、この嶋てや」

「何とたしかな証拠であろうが」

聞くより、はつと勘平が肝先にひしとこたえ、そば辺りに目を配り、袂の財布見合わせば、寸分違わぬ糸入り嶋。「南無三宝、

③絹糸を交せて織った木綿の織物

「なぜ。」「いや、親だからですよ。もつとも、夕べ、証文に判を押し、五十兩を渡されたのは本当でしょうけれど。」

「いやいや、こちらは京・大阪を相手に、たくさんのお金をかかえて商売をしている一文字屋。渡さぬ金を渡したと、うそを言うことはない。まだそのうえに、くわしい話をすれば、この親父さまが五十兩の金を、手拭にくるくると巻いて、懐に入れたので、『そりや危ない。これに入れて首にかけなさい。』と、私がいま着ているこの一重物の縞と同じ布切れでこしらえた財布を、借してあげたのです。そのうち、首にかけてもどるでしょう。」

「え、あなたが着ているこの縞のきれの財布を、ですか。」

「おお、そうです。」

「あの、この縞模様。」

「ああ、これ以上確かな証拠があるものですか。」
それを聞くやいなや、勘平はなにか思い当てることがある様子で、あたりに目を配り、たもとに入れて来た財布をよく見ると、主人の着ている着物と、寸分違わぬ糸入り縞の模様。

①決心

さては夕べ、鉄砲で打ち殺したは、舅であつたか。はあ、はつ」と、わが胸板を二つ玉で打ち抜かるるより切なき思ひ。とは知らずして、女房、

「これ、こちの人、そわそわせずと、やる物かやらぬ物か、分別して下さんせ」

「おお、なるほど。はて、もうあのように、確かに言われるからは、行きやらすばなるまいか」

「あの、とつ様に逢わいでもかえ」

「いやいや、親父殿にも今朝ちよつと逢うたが、戻りは知れまい」

「ふう、そんなりや、とつ様に逢うてかえ。それならそうと言いもせで、かか様にもわしにも案じさしてばかり」

と言うに、文字も図に乗って、

「七度尋ねて人疑えじゃ。親父の有り所知れたので、そつちもこつちも心がよい。まだこの上にも、四の五のあれば、いやとにもでんど沙汰。まあまあ、さらりとすんでめでたい。お袋も御亭も、六条参りして、ちと寄らしゃれ。さあさあ、駕に早う

「ああ、さては、夕べ鉄砲で打ち殺したのは、舅殿だつたのだ。ああ、これは」と自分の胸板を鉄砲の玉で打ち抜かれるよりも切ない思ひ。そうとは知らず、女房のお軽は、

「これ、うちの人。そんなにそわそわしないで、私を行かせるかどうか決めてください。」
「ああ、なるほど。だが、もうあのように、確かなことを言うのですから、おまえはいかねばならぬだろう。」

「えつ、お父様に逢わないままですか。」
「いやいや、親父様には今朝ちよつと逢ったが、いつ帰ってくるかは、ちよつとわからんぞ。」

「ふうん。そういうことでしたら、お父様に逢つたんですね。それならそうと言ってくれればいいのに。お母様もわたしもずっと心配していたのに。」

と言うのを聞いて、一文字屋の主人も尻馬に乗り、

「七度尋ねて人を疑え、というではありませんか。親父さまの居所がわかりましたから、みんな安心したでしょう。まだこの上に、いろいろ言うようなら、無理にも引っ立てるつもりでしたが、まあまあ、うまく片がついてめでたいことです。お母様も御亭主も、六条参りのついでに、ちと祇園へお寄りなさい。さあさあ、はやく駕籠に乗って下さい。」

③心配させてばかり

④ことわざ。人を疑うまえに、よく調べよ。よく調べてから、人を疑え

⑤居場所

⑥気持がよい

⑦あれこと文句をつける

⑧いやでも

⑨「でんど」は出所で、公。公儀のこと。裁判所に訴えて決着をつける

⑩きれいに片づいて

⑪京都六条にある東西の本願寺にお参りすること

乗りや」

① どうか
「あいあい。これ、勘平殿。もう今あつちへ行くぞえ。年寄つた二人の親達、どうでこな様のみんな世話。とりわけて、とつ様はきつい持病。気を付けて下さんせ」

② 思い苦しみながら、がまんして
と、親の死に目を露知らず、頼む不憫さ、いじらしさ。いっそ打ち明け、ありのまま話さんにも他人あり、と心を痛め堪えない。

「おお、婿殿、夫婦の別れ、いとまごいがしたかるけれど、そなたに未練な気も出ようかと思つてのことである」

「いえいえ、なんぼ別れても、主のために身を売れば、悲しうも何ともない。わしや、勇んで行く。かか様、したがとと様に逢わずに行くのが」

③ すぐに
④ 元気な
⑤ ばたばたして
「おお、それも戻らしゃつたら、つい逢いに行かしゃるぞいの。患らわぬように灸据えて、息災な顔見せに来てたも。鼻紙、扇もなけりや不自由な。何にもよいか。とばついて怪我しやんな」

⑥ 気をつけて
と、駕に乗るまで心をつけ、

「ええ。わかりました。これ、勘平様。私はもう祇園へ行きます。年寄とつた二人の親のこと、お願いしますよ。とりわけて、お父様はひどい持病がありますから、気をつけてあげてくださいね。」と、親の死んだことを知らないまま、世話を頼むふびんさ、いじらしさ。勘平は、いっそのこと打ち明けてしまおうとも思いましたが、ありのままを話すにしても、他人がいては話しくいので、つらい思いで耐えています。

「おお、婿殿、夫婦の別れゆえ、いとまごいをしていだらうが、そなたに未練な気が出ないようにと、そう言うのであらう。」

「いえいえ、いくら別れるといつても、あなた様のために身を売るのは、悲しくとも何ともありません。わたくしは、勇んで行きます。でも、お母さま、お父様に逢わずに行くのがつらくて……。」

「おお、そうじやらう。いづれ戻られたら、すぐに逢いに行くことでしよう。病気をしないように灸を据えなさい。ときには元気な顔を見せにきなさいよ。ちり紙や扇も、持っていないと不便だから、忘れないで。さわいで怪我をしたりしなさんなよ。」と、駕籠に乗るまで言葉をかけ、

「さらばや」

「さらば」

「何の因果で、人並みな娘を持ち、この悲しい目を見ることじゃ」と、齒を食いしばり泣きければ、娘は駕にしがみ付き、泣くを知らさじ聞かさじと、声をも立てずむせかえる。情けなくも駕かき上げ、道を早めて急ぎ行く。

母は跡を見送り見送り、

「ああ、よしないこと言うて、娘もさぞ悲しかる。おお、こな人わいの。親の身でさえ思い切りがよいに、女房のことぐずぐず思うて、患うて下さんな。この親父殿は、まだ戻らしやれぬことかいのう。こなた逢うたと言わしやったの」

「ああ、なるほど」

「そりやまあ、どこらで逢わしやつて、どこへ別れて行かっしやった」

「されば、別れたその所は鳥羽か、伏見か、淀、竹田」

と、口から出しだい。めつぼう弥八、種子島の六、狸の角兵衛、所の狩人三人連れ、親父の死骸に蓑打ち着せて、戸板に乗せ、

「では、さらばじゃ。」

「何の因果で、こんな美しい娘を持ちながら、こんなにつらい思いをしなければならぬのでしよう。」と、齒を食いしばり泣いているのと、娘は駕籠にしがみつき、泣いているのを知られまいと、声をも立てずにむせびあげるばかりです。駕籠かきは、そういう情も知らないふうで、さつさと道を急いでいってしまいました。

母はあとを見送り見送り、「ああ、言ってもしょうのないことを言ってしまったて、娘もさぞ悲しかったことだろう。ああ、あなたも親の方がこうして思い切りよく別れたのに、女房のことをぐずぐずと思つて、悲しんではいけませんよ。ところで、うちの親父さまは、まだ戻られませんか。あなた、逢ったといっていましたね。」

「ああ、言いました。」

「そりやまあ、どこで逢いました。それで、親父さまはどこへ別れて行かれましたか。」

「いや、その、別れた場所は、鳥羽でしたか、伏見でしたか、淀か、竹田だったか。」

と、口から出まかせを言うところへ、めつぼう弥八・種子島の六、狸の角兵衛などと呼ばれるこのあたりの狩人が三人連れで、親父さまの死骸に蓑をかぶせ、戸板に乗せて、どやどやと家に入ってきました。

① いずれも地名

② 死人やけが人を運ぶときに用いる
戸板のこと

①夜の獵
②片付けて

どやどやと内に入る。

「夜山^①しもうて戻りがけ、ここの親父が殺^②されていていられたゆえ、狩人仲間が連れてきた」

と、聞くよりはつと驚く母。

「何者の仕業。これ婿殿、殺した奴は何者じゃ。敵を取って下され。のう、これ親父殿、親父殿」

と、呼べど叫べど、そのかいもなくよりほかのことぞなき。

狩人ども口々に、

「おお、お袋、悲しかる」

「代官所へ願うて、詮義してもらわしやれ」

「気の毒だ、気の毒だ」

と、うち連れて、皆々わが家へ立ち帰る。

母は涙のひまよりも、勘平がそばへ差し寄って、

「これ婿殿。よもやよもや、よもやよもやは思えども、合点がいかぬ。なんぼ以前が武士じゃとて、舅の死に目見やしやったら、びつくりもしやるはず。こなた、道で逢うたとき、金受け取りはさっしやれぬか。親父殿が何と言われた。さあ、言

「夜の獵をおわつて帰りがけに、ここの親父さまが殺されていたので、狩人仲間連れてきた。」と、聞いてびつくりする母親。

「何者の仕業ですか。これ婿殿、殺した奴は何者じゃ。敵を取って下さい。ああ、これ、親父殿、親父殿。」

と、呼べど叫べど、そのかいもなく、ただ泣くしかないでした。狩人どもも口々に、

「おお、お袋さま、さぞ悲しいだろう。」

「代官所へ訴え出て、犯人をさがしてもらいなさい。」

「気の毒なことじゃ。」と、また連れだつて、我が家へもどっていきました。

母は涙を流しながらも、勘平のそばに寄つて、

「これ婿殿。よもやとは思うのですが、どうも腑に落ちません。いくらもと武士だからといつても、舅の死に目をごらんになったら、びつくりするはずなのに、平気な様子。あなた、道で逢った時に、金を受け取ったりはしていませんか。そのとき、親父殿が何と言いました。さあ、言ってください。さあ、何と言いましたか。どうせ、返事はできないはず。できない証拠は、これ、ここに。」

③「かいもなく」の「なく」と「泣くより他の」の「泣く」とがかけことばになっている

④幕府の直轄地(天領)に置かれ、司法や検察業務を担当した役所
⑤調べること

① あんた。おまえ。親しみをこめた言い方
② 太陽を神様と見て言う言い方

③ わかった

④ こっそり取って

⑤ みんな渡さないのではないかと思つて

⑥ まじめな人

⑦ 京都という遠いところ。三界は遠いところを意味する接尾語
⑧ 大切な宝。お軽のこと

⑨ ことわざ「飼犬に手を食われる」。恩をほどこしたのからあだを受ける

わっしやれ。さあ、何と。どうも返事はあるまいがの。ない証拠は、これ、ここに」

と、勘平が懐へ手を差し入れて引き出すは、さつきにちらりと見ておいたこの財布。

「これ、血の付いてあるからは、こなたが親父を殺したの」

「いや、それは」

「それはとは。ええ、わごりよはのう、隠しても隠されぬ。天道様が明らかかな。親父殿を殺して取ったその金にや、誰にやる金じや。むう、聞こえた。身貧な舅、娘を売ったその金を、中で

半分くすねておいて、皆やるまいか、と思つて、こりや、殺して取ったのじやな。今という今までも、律儀な人じやと思つて

だまされたが、腹が立つわいやい。ええ、ここの人でなし。あんまりあきれて、涙さえ出ぬわいやい。のう、愛しや、与市兵衛殿。畜生のような婿とは知らず、どうぞ元の侍にしてやりたい

と、年寄つて夜も寝ず、京三界を駆け歩き、珍財を投げ打つて世話さしやつたも、かえつてこなたの身の仇となつたか。飼

い飼う犬に手を食はると、ようもようもこのようにむごたら

と、勘平の懐へ手を差し入れて引き出したのは、さつき、ちらりと見かけていたあの財布です。

「このように、血が付いているところを見ると、あなたが親父さまを殺したのですか。」

「いや、それは。」

「それはとは。ええ、おまえという人は。いくら隠しても隠しはできませんよ。お天道様が見ています。親父さまを殺して取ったその金は、誰にやるつもりかと思つていますか。ああ、わかりました。貧乏暮らしの舅だから、娘を売ったその金を、半分かくしておいて、全部くれないのではないかと疑つて、あなた、殺して取ったのでしょうか。今という

今までも、律儀な人だと思つて、だまされてきました。ええい、腹が立つ。ええ、この人でなしめ。あんまりあきれて、涙も出ませんよ。かわいそうに、与市兵衛殿。畜生のような婿とは知らずに、なんとかもこのように侍にしてやりたい、と年をとつているのに、

京じゆうを駆けまわり、娘という宝まで投げ出して、世話をしたのが、かえつてあなたの身の仇となりましたねえ。飼犬に手を食われるというのは、このことです。よくもよく

も、このようにむごたらしく殺したことじや。こりや、ここの鬼、蛇め。とと様を返してくれ。親父殿を生きてもどしてくれ。」

①「あら」には「あらず」がかかっている。あらくれ男
②もとどり。髪を頭上で束ねたとこ
ろで、ここを元結（もとゆい）で
しばる

③切り刻んだとしても
④腹立ちが直るか、いや直りはしな
い

⑤文句を並べて
⑥がばつと

⑦全身

⑧藺草（いぐさ）で作った長く深い
編み笠。人目を避けるために使用
する

⑨尋ねてきた

⑩粗末な私たちだけの脇差し

⑪二人に対する尊敬の呼び方

⑫うちわのこと

しゅう殺されたことじゃまで。こりや、ここな鬼よ、蛇よ。と
つ様を返せ。親父殿を生けて戻せやい」

と、遠慮会釈もあら男の、たぶさをつかんで、引き寄せ引き寄
せ叩き付け、

「ずたずたに切りさいなんだとて、これで何の腹が癒よ」

と、恨みの数々、くどき立て、かつぱと伏して、泣きいたる。

身の誤りに勘平も、五体に熱湯の汗を流し、畳に食い付き、

天罰と、思い知ったる折りこそあれ、深編み笠の侍二人、

「早野勘平在宿をし召さるか。原郷右衛門、千崎弥五郎、御意
得たし」

と、おとなえば、折悪けれども勘平は、腰ふさぎ脇ばさんで出
で迎い、

「これはこれは御両所ともに、見苦しきあばら屋へ、おいでか
たじけなし」

と、頭を下ぐれば、郷右衛門、

「見れば家内に取り込みもありそうな」

「いやもう、ささいな内証事。お構いなくとも、いざまずあれ

と、遠慮会釈もなく、男のもとどりをつかん
で、引き寄せ引き寄せ、たたきつけ、
「ずたずたに切りさいたとしても、これでど
うしておさまるものか。」

と、恨みの数々を言いながら、そこに伏して
泣いています。わが身の犯した過ちに勘平も、
五体に熱湯のような汗を流し、畳に食い付き
て、これも天罰だと、覚悟しているところへ、
深編み笠の侍が二人やってきました。

「早野勘平は家におりますか。原郷右衛門で
ございます。」

「千崎弥五郎でございます。お目にかかりた
い。」

と案内を請います。勘平は、悪いときに、と
思いながらも、粗末な脇差しをさして出迎え
ます。

「これはこれはお二人様。この見苦しきあば
ら屋へ、わざわざお出でいただきまして、申
し訳ありません。」

と、頭を下げると、郷右衛門は、

「なにやら、取り込み中のようなだが。」
「いやもう、ちよっとしたもめごとです。お
かまいなく。まず、向こうの方へ。」

「では、そのようにしよう。」

へ」

「しからば、さようになしたさん」

と、ずっと通り、座につけば、二人が前に両手をつき、

「このたび、殿の御大事にはずれたるは、拙者が重々の誤り。

申し開かん詞もなし。何とぞそれがしが科、御許しをこうむり、

- ① 刃傷の場に居合わせなかつたこと
- ② 言い訳する
- ③ 自分をさす。武士などが使うやや堅苦しい言い方
- ④ 罪
- ⑤ 主君の死後の一周忌

亡君の御年忌、諸家中諸共相勤むるように、御両所の御取りなし、ひとえに頼み奉る」

と、身をへり下り述べれば、郷右衛門取りあえず、

「まずもって、その方、貯えなき浪人の身として、多くの金子

御石碑料に調進せられし段、由良介殿、はなはだ感じ入られ

しが、石碑を営むは亡君の御菩提、殿に不忠不義をせしその方

- ⑥ 死者の霊をうやまつた言い方
- ⑦ 意向に合わない

の金子をもつて、御石碑の料に用いられんは、御尊霊の御心にも叶うまじ、とあつて、金子は封のまま相戻さる」

と、詞の内より、弥五郎、懐中より金取り出し、勘平が前に

差し置けば、はつとばかりに気も転動。母は涙と諸共に、

「こりや、この悪人面。今という今、親の罰思い知ったか。

- ⑧ こちらの
- ⑨ 来世の極楽往生

皆様も聞いて下され。親父殿が年寄つて、後生のことは思わず、

と、中に入りすわりました。勘平は二人の前に両手をつき、

「このたびの、殿の御大事に参加できなかつたのは、私の至らないせいです。弁解の言葉

もありません。なんとか、私の罪をお許しいただき、お殿様の法事に、お二人に口添えを

していただいて、加えていただけますよう、心からお願ひいたします。」と言いますと、

郷右衛門は、

「まずなによりも、まずしい浪人の身のそなたが、多額のお金を主君の石碑を建てるため

に、調達してきたことに関しては、由良介殿も大変感心しておられる。が、殿の菩提をと

むらうその石碑のためのお金に、殿に不忠不義を働いたそなたのお金を使うのは、殿の御

心にはかなわないことであろうとおっしゃつて、お金は封のまま差し戻されたのじゃ。」

と、言いながら、弥五郎は、ふところよりお金を取り出し、勘平の前に置きました。勘平

はびつくりし、母親は涙を流しながら、

「こりや、この悪人め。今という今、親の罰があつたのがわかつたか。皆様も聞いてく

ださい。親父殿が年をとつて、来世のことも考えず、婿のために娘を遊女に売り、お金を

調べてもどられたのを待ち伏せして、あのやうに殺して取つた金じゃからな。

① 天の神様が見ていなければわからないところだが

② 神様も仏様も頼りにならない

③ 手に取り

④ 人でなし。人の道に外れたことをする人

⑤ 刃が長く、まっすぐで大ぶりな槍

⑥ 田楽はいまのおでん。くしにさしたおでんのようにする、の意

⑦ ことわざ。いくら困っても不正なことはしない。中国の孔子が、盗泉というところでのどが渴いたが、その地名を嫌ってその地の水を飲まなかつた故事に基づく

⑧ 生まれつき

⑨ 世間に知られて

婿のために娘を売り、金調えて戻らしやるを待ち伏せて、あのように殺して取った金じゃもの、天道様がなくば知らず、なんで御用に立つものぞ。親殺しの生き盗人に罰を当てて下されぬは、神や仏も聞こえぬ。あの不孝者、お前方の手にかけて、なぶり殺しにして下され。わしや腹が立つわいの」

と、身を投げ伏して泣きいたる。聞くに驚き、兩人刀おっ取り、弓手馬手に詰めかけ詰めかけ、弥五郎声を荒らげ、

「やい、勘平。非義非道の金取って、身の科の詫びせよとは言わぬぞよ。我がような人非人、武士の道は耳に入るまい。親同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人は、大身槍の田楽刺し、拙者が手料理ふるまわん」

と、はつたとにらめば、郷右衛門、

「渴しても盗泉の水を吞まずとは、義者のいましめ。舅を殺した取ったる金、亡君の御用金になるべきか。生得汝が不忠不義の根性にて調えたる金と推察ありて、つき戻された由良介の眼力、天晴天晴。さりながら、はあ、情なきはこのこと。世上に流布ありて、塩冶判官の家来、早野勘平、非義非道を行いしと言わ

天の神様が知らないはずはない。そんな金がどうして御主君のお役に立つものか。親殺しの盗人に、罰を当てて下さらなかつたら、神や仏はこの世にいないものだと思うところでした。あの不孝者めを、皆様の手で、どうかなぶり殺しにしてください。わたしは、ほんとうに腹が立っております。」

と、身を投げ伏して泣いています。それを聞いたふたりはびっくりし、刀を取って左右から勘平に詰め寄りました。弥五郎は声を荒らげて、

「やい、勘平。非義非道の金を取って、自分の詫びごとに使わせたりはさせないぞ。おまえのような人非人は、武士の風上にも置けないやつだ。親も同然の舅を殺し、金を盗んだ重罪人は、この槍で田楽刺しにしてやる。」

と、にらみつけます。郷右衛門も、「渴しても盗泉の水を吞まずということわざもある。舅を殺して奪った金で、なき主君の御役に立てられるはずがなろう。おまえには、もともと不忠不義の根性があると見抜いて、つき返された由良介殿の眼力は、まことに見事というしかない。とはいえ、なんとも情けないとしかいいようがないではないか。このことが世間にひろまって、塩冶判官の家来早野勘平が、主君のために非義非道を働いたと噂されるようになったら、おまえだけの恥ではない。」

① ばかもの。愚か者

② わからない

③ 仏教でいう四魔の一。ふつうには天狗のこととされる

④ 事情をくわしく話し、道理を説いて責め付けること

⑤ 着物の上半身を脱いで、両肩をあからわす

⑥ 次第

⑦ 昨夜
⑧ 暗闇に紛れること

⑨ ことわざ。「いすか」はスズメ目アトリ科の鳥。くちばしの先端が食い違っている

ば、汝ばかりが恥ならず。亡君の御恥辱と知らざるか、うつ
け者。さほどのことのわきまえなき汝にてはなかりしが、い
なる天魔が見入りし」
と、鋭き眼に涙を浮かめ、事をわけ、理を責むれば、たまり
かねて勘平、諸肌押しぬぎ、脇差しを抜くより早く腹にぐつと
突き立て、

「ああ、いずれもの手前、面目もなき仕合わせ。拙者が望み叶
わぬときは切腹と、かねての覚悟。我、舅を殺せしこと、亡君
の御恥辱とあれば、一通り申し開かん。兩人ともに聞いてたべ。
夜前、弥五郎殿の御目にかかり、別れて帰る暗紛れ、山超す猪
に出会い、二つ玉にて打ち止め、駆け寄って探り見れば、猪に
はあらで旅人。南無三宝、あやまつたり、薬はなきか、と懐中
を捜し見れば、財布に入りたるこの金、道ならぬことなれども、
天より我に与ふる金と、すぐに馳せ行き、弥五郎殿にかの金渡
し、立ち帰って様子を聞けば、打ち留めたるはわが舅。金は女房
を売った金。かほどまで、することなすこと、いすかのはし
ほど違うというも、武運に尽きたる勘平が、身の成り行き。推量

なき御主君までも、はずかしめることになる
のがわからないか。うつけものめ。この程度
のことがわからないとは、いったい、どんな
魔物がおまえにとりついたのであろうか。」と、
鋭い眼に涙を浮かべ、すじみちたてで勘平を
責めます。たまりかねた勘平は、腹を押し広
げ、脇差しを抜くやいなや、腹にぐつと突き立
てて、「ああ、皆様の前で、本当に面目もご
ざいませぬ。私の望みがかなえられないとき
は、前々から切腹しようと考えておりました。
わたくしが舅を殺したことが、なき御主君を
辱しめることになるというのによくわかりま
す。一言だけ言い訳をさせて下さい。お二人
とも聞いてください。昨夜、街道で弥五郎殿
にお目にかかり、別れて帰る暗闇のなかで、
山を越えていく猪を見つけ、鉄砲で打ち止め
たと思い、駆け寄ってさぐりみましたところ、
猪ではなく旅人でした。あれ、これはあやま
つた、薬を持っていないか、と旅人のふところ
を捜したところ、財布に入ったこの金が見
つかったのでございます。道にはずれたこと
ではあります、これは天が私に与えた金で
あると思います、すぐに弥五郎殿を追いかけて行
き、その金を渡し、家に帰って様子を聞いた
ところ、どうやら鉄砲で打ったのは、私の舅
らしいのです。しかも、その金は、わ
が女房を遊女に売った代金。こんなにまで、
私のすることなすことが、いすかのはしのよ
うに食い違ってくるというのも、これはまさ
に私の運が尽きた証拠なのでしょう。

①さつと。てきばぎと

あれ」

と、血走る眼に無念の涙。子細を聞くより、弥五郎、ずんど立ち上がり、死骸を引き上げ打ち返し、「むうむう」と傷口改め、「郷右衛門殿、これ見られよ。鉄砲傷に似たれども、これは刀でえぐった傷。ええ勘平、早まりし」

②切腹した勘平

と言うに、手負いも見てびつくり、母も驚くばかりなり。郷右衛門、心付き、

③あなた。二人称の敬称として用いる

「いや、これ千崎殿。ああ、これにて思い当たつたり。御自分も見られし通り、ここへ来たる道端に、鉄砲受けたる旅人の死骸。立ち寄り見れば、斧定九郎。強欲な親九太夫さえ見限つて、勘当したる悪党者。身のたたずみなきゆえに、山賊すると聞きたるが、疑いもなく、勘平が舅を討つたはきやつが業」

④身を持ち崩して、居場所がなくなる

「ええ、そんなりや、あの親父殿を殺したのは、外の者でござりまするかえ。はあはっ」

と、母は手負いに縋がり、

「これ、手を合わして拝みます。年寄りの愚痴な心から、恨み言うたは皆誤り。こらえて下され、勘平殿。必ず死んで下さ

⑤うらみがましい心

こうなつては、あとは切腹して、身の潔白を証明するしかないのです。どうか皆様、わか

と、血走った眼に無念の涙をためています。その訳を聞くやいなや、弥五郎はすぐに立ち上がり、死骸のむしろをひきあけて、あちこち点検し、傷口のあたりを調べています。

「郷右衛門殿、ごらんなさい。この傷は鉄砲傷のようにみえますが、実は刀でえぐった傷です。ええ、勘平、早まったな。」

と言うので、腹に刀を突き立てたままの勘平も、見てびつくりし、母親も驚くだけです。

郷右衛門も、ようやく気がつき、

「そうだそうだ、千崎殿。それで思い当たりました。あなたもごらんになったように、ここへ来る途中の道端に、鉄砲を受けた旅人の死骸を見つけて、立ち寄って調べて見たところ、斧定九郎の死骸でした。強欲な親の九太夫さえも見限つて勘当したほどのあの悪党が、他にしようもなく山賊をしていたと聞きました。とすれば、勘平の舅を殺したのはあいつのしわざに違いない。」

「ええ、それなら、あの親父殿を殺したのは、ほかの者でございませうか。ええっ。」

と、母は勘平にすがりつき、

「これ、手を合わして拝みます。この年寄りの、おろかな心から、おまえに恨みごとを言ったのは、すべて間違ひでした。許してくださいよ、勘平殿。死なないうでくださいよ。」

①不名誉。悪い評判
②死ぬときの思い
③死出の山は死後七日目、三途の川は十四日目に到達するとされる。死後に行く山と川を並べた

④弓と矢を守る神。軍神。八幡さま
⑤ひとつの功績を立てた

⑥誓約書。起請文

⑦企てに加わった人の名前を書き連ねたもの

⑧本心

⑨携帯用の筆記具。筆と墨が入っている

るな」

と、泣き詫づれば、顔振り上げ、

「ただ今、母の疑いも、我が悪名も晴れたれば、これを冥途の思い出し、跡より追っ付き、舅殿、死出三途を伴わんと、突っ込む刀引き廻せば、

「ああ、暫く暫く。思わずも、その方が舅の敵討ったるは、いまだ武運に尽きざるところ。弓矢神の御恵みにて、一功立ったる勘平。息のあるうち郷右衛門が密かに見するものあり」と、懐中より一卷を取り出し、さらさらと押し開き、

「この度、亡君の敵、高の師直討ち取らんと、神文を取りかかし、一味徒党の連判、かくのごとし」

と、読みも終わらず苦痛の勘平、

「その姓名は誰々なるぞや」

「おお、徒党の人数は四十五人。汝が心底見届けたれば、その方を差し加え、一味の義士、四十六人。これを冥途の土産にせよ」

と、懐中の矢立て取り出し、姓名を書き記し、

と、泣いて詫びます。勘平は顔を振りあげて、「これで、私への疑いも晴れました。これを冥途のみやげにして、舅殿を追いかけるとにします。いまから追いかければ、三途の川あたりで、ごいっしょでできることでしょう。」

と、腹に突っ込んでいた刀をかき廻します。「ああ、待て待て。そなたが舅の敵を討ったということは、まだ運は尽きていないということではないか。神様の御恵みで、せっかくこうして功を立てた勘平に、まだ息のあるうちに、みせておきたいものがある。」と、郷右衛門はふところから一卷の巻き物を取り出し、さらさらと押し開いて読み上げます。

「この度、なき御主君の敵、高の師直討ち取らんと、誓約書を取りかわし、一味徒党の連判、かくのごとし。」

と、読みも終わる前に、苦痛にゆがむ勘平が声をあげます。

「そこに並ぶ方々の名は？」

「おお、徒党の人数は合計四十五人。そなたの本心はよくわかったので、そなたの名も加えておいたから。一味の義士、あわせて四十六人じゃ。これを冥途の土産にせよ。」と、ふところに持っていた矢立てを取り出して、勘平の姓名を書き加えました。「勘平、血判じゃ。」

① 誓約書や起請文の名前のところに、約束を守る証拠として押す。ふつうは、中指の爪の生え際と関節の間に針を刺して血を絞り出し、署名の右肩にぼたりと落とす

② 内臓

③ 無駄にはならない。「反故」は使用済みの不用になった紙

④ 「紫摩黄金」は紫色を帯びた曇りのないよく光る黄金。仏につづく。「嶋」と「紫摩」とで頭韻を踏み、この財布に入った金は紫摩黄金で作った仏のように貴重なものなので、の意

⑤ 成仏せよ

⑥ 精神、魂

「勘平、血判」

「心得たり」

と、腹十文字にかき切り、臓腑をつかんでしつかと押し、

「さあ、血判仕った。ああ、かたじけなや、ありがたや。わが

望み、達したり。母人、歎いて下さるな。舅の最期も、女房

の奉公も、反故にはならぬこの金。一味徒党の御用金」

と、言うに、母も涙ながら、財布と共に二包み、二人が前に差

し出し、

「勘平殿の魂の入ったこの財布。婿殿じゃと思つて、敵討ちの

御供に連れてござつて下さりませ」

「おお、なるほど、もつともなり」

と、郷右衛門、金取り納め、

「思えば思えばこの金は、嶋の財布の紫摩黄金。仏果を得よ」

と、言いければ、

「ああ仏果とはけがらわし。死なぬ、死なぬ。魂魄、この土に

とどまつて、敵討ちの御供する」

と、言う声もはや四苦八苦。母は涙にかきくれながら、

「心得ました。」と、腹十文字にかき切つたその内臓を掴んでしつかりと血判を押します。

「さあ、血判もすんだ。ああ、ありがたいことじゃ。私の望みはかなえられました。お母

さま、歎いてくださるな。舅殿の死も、女房の奉公も、無駄にはなりません。この金は、

敵討ちのための御用に立ちます。」

と言うに、母親も涙ながら、財布といっしょに、二包みの金を二人の前に差し出し、

「勘平殿の魂の入ったこの財布です。私の婿殿じゃと思つて、ぜひ、敵討ちのときには御供に連れていって下さいませ。」

「おお、なるほど、もつともじゃ。たしかに、持つていくぞ。」と、郷右衛門は、その金を取り納めます。

「この金はたしかにいただいた。成仏してくれよ、勘平」

と、声をかけますと、

「成仏などとはけがらわしいこと。わたくしは死にません。この魂は、まだまだこの世にとどまつて、敵討ちの御供をするつもりでございます。」

と、言う声もはや、くるしそうです。母親は涙を流しながら、

「のう、勘平殿。このことをせめて娘に知らせ、せめてそなたの死に目に逢わしてやりたいのじゃが。」

①特別

②仕事をきちんとしないこと

③この当時は女性でも用いた
④不幸。前世の悪業の報いによる、
とされる

「のう、勘平殿。このことを娘に知らし、せめて死に目に逢わしてやりたい」

「いやいやいや。親の最期は格別、勘平が死んだこと、必ず知らして下さるな。御主のために売ったる女房、このこと聞いて不奉公せば、お主に不忠するも同然。ただそのままに差し置かれよ。さあ、思い置くことなし」

と、刀の切っ先喉にぐつと指し貫き、かつぱと伏して息絶えたり。

「やあ、もう婿殿は死なしゃったか。さてもさても、世の中におれがような因果な者がまた一人あるうか。親父殿は死なしやる。頼みに思う婿を先立て、愛しかわい娘には生き別れ、年寄ったこの母が一人残って、これがまあ、何と生きていらりようぞ。これ、親父殿、与市兵衛殿、おれも一緒に連れて行て下され」

と、取り付いては泣き叫び、また立ち上がって、
「これ婿殿、母もともに」

と、縫がり付いては伏し沈み、あちらでは泣き、こちらでは泣

「いやいや。親の最期はともかく、勘平が死んだことだけは、決してお軽には知らせてくださいますな。御主君のために遊女に売った女房が、私の死んだことを聞いて、勤めをやめたりしては、主君に不忠をするのと同じです。そのまま何も言わずにおいてください。もう、私には思い残すことはありません。」

と、刀の切っ先を喉にぐつと指しつらぬき、どつと伏して息が絶えました。

「ああ、もう婿殿は死んでしまいましたか。さてもさても、この世の中でわたしほど因果なものがいましようか。親父殿は死に、頼みに思っていた婿に先き立たれ、いとしい、かわいいと育てた娘とは生き別れになりました。年寄ったこの母が一人だけ残って、まあ、生きていくかいかいもございません。これ、親父殿、与市兵衛殿、私も一緒にあの世に連れて行て下さい。」

と、死体に取り付いて泣き叫び、また立ち上がって、

「これ婿殿、私もいっしょに死にます。」
と、すがりついて泣いています。あちらで泣き、こちらで泣き、声の限りに歎いているさまは、目も当てられぬほどです。

①数字を連ねた言い方。人の死後四十九日間は死者の霊はこの世にとどまつているとされるので、死後四十九日目に営む法要が忌明けとしてもっとも重要とされる。その後、百日目。一周忌と営まれていく

き、わつとばかりにどうと伏し、声をばかりに歎きしは、目も当てられぬ次第なり。

郷右衛門つつ立ち上がり、

「やあ、これこれ老母。歎かるるは理なれども、勘平が最期の様子、大星殿にくわしく語り、入用金手渡しせば、満足あらん。首にかけたるこの金は、婿と舅の七七日、四十九日や五十両、合わせて百両。百か日の追善供養、跡ねんごろに弔われよ。さらばさらば」

「おさらば」

と、見送る涙、見返る涙、涙の浪の立ち返る、人もはかなき、うきふしや。

②つらいことだ

郷右衛門は立ち上がり、「やあ、これこれ母上。歎くのは当然ではありますが、勘平殿の最後の様子は、大星殿に詳しく話し、このお金をお渡ししますから。そうすれば、勘平もお父上も満足なさるはずです。婿殿とお父上の四十九日や百か日の供養は、ねんごろにとむらってくださいますよ。では、失礼いたします。」

「さらばでございます。」

と、見送るものの目にも涙、見返る二人の目にも涙、涙の浪が寄せては返す、ほんとうにはかない人の運命でございます。

尾口のでくまわし教材作成委員会委員

木越 治（金沢大学文学部文学科教授）

道下甚一（東二口文弥人形浄瑠璃保存会会長）

中内幹雄（深瀬のでくまわし保存会事務局長）

木田 清（白山市教育委員会文化課文化財係長）

協力者

土谷 梓（金沢高等工業専門学校教諭）

西尾 素（金沢大学大学院文学研究科修了）

金 永昊（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程在学）

木越秀子（金沢大学大学院文学研究科在学）

高橋毅志（金沢大学文学部四年）

上田泰司（金沢大学文学部三年）

平能一創（金沢大学文学部三年）

丸井貴史（金沢大学文学部三年）

山宮有祐（金沢大学文学部三年）

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

仮名手本忠臣蔵

発行 平成二十年三月

編集 尾口のでくまわし教材作成委員会

発行 加賀の民俗文化財活用委員会

委員長 喜田絃雄（白山市教育委員会教育長）

石川県白山市殿町三十九 白山市教育委員会

文化課内 TEL 076-274-9573

印刷 能登印刷株式会社 金沢市武蔵町七番十号